

## 創作活動を取り入れた俳句指導の工夫

上川寛子

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: hi\_kamikawa@tottori-u.ac.jp

**KAMIKAWA Hiroko** (Tottori University Junior High School) : **Device of the *haiku* guidance to which creative activity was introduced**

**要旨** — 従来、俳句の授業では名句の鑑賞が中心的な活動であった。短型詩である俳句は読み手に自由な読みが任されるおもしろさがある。一方で、読解の困難さも併せ持ち、生徒の苦手意識にもつながっている。そこで、苦手意識を払拭し、俳句に親しむ態度を育成するとともに、言語感覚を豊かにし俳句の鑑賞に生かすことをねらいとして俳句の創作を行った。授業では、俳句を創作し推敲するという体験を通し、言葉の持つ意味を吟味し言葉の持つ繊細な意味を捉えようとする姿が見られた。

**キーワード** — 俳句, 創作活動, 伝統的な言語文化

**Abstract** — In traditional *haiku* lesson, to appreciate phrases was the main activity. *Haiku*, a short poem, has an interesting aspect as readers can read it in their own way. On the other hand, students find it difficult to read precisely, which leads them to think they are not good at reading it. For these reasons, I let students create their own *haiku* in my lessons to get rid of their awareness that they would be hard to deal with *haiku*, foster their attitude toward *haiku* as well as enriching students' sense for languages. In class, most of the students tried to examine the meaning of words closely and grasp the meaning of words which are exquisite through the experience of creating and practicing their *haiku*.

**Key words** — Haiku, Creative activity, traditional language culture

### 1. はじめに

現行の学習指導要領では、新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が設けられた。そして、改善の具体的な内容として、古典をはじめとする伝統的な文章や作品を読んだり、書き換えたり、演じたりすることを通して、言語文化を享受し継承・発展させる態度を育成することが提示された。これまでより、古典学習が重要視されているということである。その目的は、我が国の言語文化に触れることで感性や情緒を育むことである(文部科学省 2008)。

日本の伝統的な文化である俳句は、五・七・五の三句十七音からなる有季短型詩である。短い音数だからこそ、その言葉の一つ一つが吟味されて用いられている。言葉の持つ意味を考えたり、作者の言葉に対する思いを読み取ったりする中で、言葉を工夫することが豊かな言語生活につながっていくことが感じられる教材である。

一方で、言葉の制限によって鑑賞が読み手に任

される部分が大きいというのは、生徒にとっては難しさを感じる部分でもある。授業を始める前、挙手により確認すると俳句の授業が好き、または得意な方だと答えた生徒は各クラス数人程度であり、大半の生徒が苦手意識を持っているようだった。俳句については五・七・五の定型詩であること、季語が必要であることなど俳句の知識は持っているものの、俳句の鑑賞をしようと思っても、何を言おうとしているか分からない、どう読めばよいのか分からず難しいと感じているようである。俳句を味わうためには、言語感覚を磨くことが必要である。一つ一つの言葉が持つイメージを広げ、俳句を味わおうとする態度の育成も重要になっていく。そのため、従来のように、類型化した教師主導型の解釈・鑑賞にとどまらない授業の工夫が必要になってくる。松本ら(2014)は俳句を比較・検討し、改作する活動を通して、伝統的な言語文化としての価値を見いだすことができたと述べている。また、藤田ら(2019)は俳句の創作と句会を行っている。

ペアやグループでの活動を取り入れることで、様々な視点から句の分析を行う様子が述べられている。皆川(2017)は、俳句の鑑賞・創作には、「一人ひとりが自ら学び判断し自分の考えを持って、他者と話し合い、考えを比較吟味して統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、さらに次の問を見つける」過程が見られると述べている。創作することで、言葉に向かい合いよりよい解に向かっていく姿は、本校のやりくりに通じる力と言える。

従来、短歌や俳句の学習では、鑑賞をしたあとの終末の活動として創作が位置づけられることが多かった。しかし、俳句を苦手と感じている生徒が多いことを踏まえ、まずは俳句を身近に感じる体験が必要だと考えた。久留島(2017)は、俳句の創作を鑑賞の導入として取り入れることでも、定型や季語の理解が深まると述べている。俳句の創作を初めに行い作り手の立場に立つことで、作者の意図を考えることにつながり鑑賞に役立てることができると考え単元を構成した。

## 2. 単元で提案するやりくりのたとえば

平成29年告示の学習指導要領では、語彙を豊かにする指導の改善・充実が図られている。学習指導要領解説によると「語彙を豊かにする」とは、「話や文章の中で使いこなせる語句を増やすとともに、語句の意味や使い方に対する認識を深め、語感を磨き、語彙の質を高める」ことである。

国語の授業においては、次のようなことがやりくりとして挙げられるのではないだろうか。

- 自分たちの持っている語彙や情報を、状況に合わせて活用すること。
- 自分や他者の意見を検討し、より適切な意見がどれか判断すること。
- 表現する際、どのような表現が有効なのか検討し、よりよいものを使おうとすること。
- 文章中から根拠となる表現を探ること。

これらから、国語では、文章中の表現から読み取れるものに既存の知識や体験を関連させ、言葉が表す意味をより広く深く考えたり、よりよい表現を求めて自分たちでその効果を検討したりすることもやりくりと言えるのではないかと考える。

そこで、今回の実践では、まず俳句の創作を行う中で、季語の働きや効果について体験的に捉

えさせる。また、句会を取り入れ、作った句を相互に批評することで、言葉のイメージの広がりや表現の優れた点を言語化して捉え、表現に着目する姿勢を養いたい。そして、俳句の鑑賞に関しても、積極的な態度で取り組めることを目指している。

本報告は、生徒の気付きを中心とした俳句の創作に関する実践内容を記したものである。

## 3. 授業の実際

### 3.1 学習計画

#### 第1次 俳句の創作

- 第1時 俳句創作ゲームにより、俳句に親しむ。
- 第2時 身の回りの出来事から俳句の材料を見つける。基本的な俳句の作り方を知る。
- 第3時 季語の意味を捉える。
- 第4時 季語の働きを考え句作する。俳句の推敲のポイントを知る。
- 第5時 俳句をよりよいものに推敲する。
- 第6時 ミニ句会により俳句を鑑賞する。

#### 第2次 俳句の鑑賞

- 第6時 教科書の俳句を鑑賞する。
- 第7時 俳句の批評文を書く。(全7時間)

### 3.2 季語に関する指導

俳句の決まりとして、定型であること、季語を用いることがあげられる。季語は、季節を伝えることだけではなく、長い歴史の中で積み上げられた様々なイメージを含み句意を豊かに伝える役割を持っている。俳句の内容に関係のない季語が使われているように見えて、実は言葉が持つイメージや季語が伝える情景が作者の思いをより鮮烈に補強する。だからこそ、三句十七音という短い詩でありながら俳句の世界が広がっていくのである。逆に季語の役割を理解せずに俳句に接すると、つながりが分からず季語が理解を妨げることになる。活用できる季語を増やすことは俳句の創作や鑑賞を行う上で非常に重要なことである。

しかし、前述したように教師主導の鑑賞・解釈では生徒の俳句に対する興味・関心は薄れるばかりである。また、季語の知識を得たとしても、季語が表すものについて考えようとしなければ俳句のおもしろさは伝わらない。知識としての季語ではなく、語

彙力としての季語を習得する工夫が必要である。そこで、今回の実践では、生徒自身に季語が表す意味を考えさせ、体験的に捉えさせたいと考えた。

まず、第1時で生徒の楽しく俳句にふれあえる活動として俳句創作をゲームとして行った。国語科では、話し合いが活性化するよう3人グループの活動を取り入れている。そのグループで、単語をそれぞれが出し合い、偶然集まった言葉でできた俳句を楽しんだ。意図してできた句ではないが、味わってみると言葉の後ろに様々なストーリーが膨らんでいき、俳句の世界の広がる可能性を感じることができた。その後、俳句創作に入っていくため季語について扱った。例として俳句の季語の部分を空欄にし、様々な季語を入れることで俳句の意味が変わっていくのを感じ取らせた後、できるだけ多くの季語に触れられるようにした。

授業では、座標軸に「ポジティブ⇔ネガティブ」、「穏やか⇔激しい」という軸を置き、季語がどのような作者の思いに重なるのか振り分けさせた(図1)。たとえば、「サイダー」ははじけるようなさわやかさが連想され、「ポジティブで激しい」感情に重なるという考え方である。グループで1枚のワークシートにまとめさせることで、自分の持つイメージと友達のものを持つイメージを重ねながらまとめた。生徒には季語の一覧をまとめたプリントも準備していたが、積極的に歳時記や辞典を活用する様子が見られた。食べ物、植物、風物など季節の分かりやすい言葉が中心であったが、「風薫る」「雲の峰」「木下闇」「蟬時雨」など、初めて出会う言葉も扱っていった。正確な言葉の意味を捉えていないものもあると思われるが、言葉の意味に着目し捉えようとする態度にはつながったのではないだろうか。

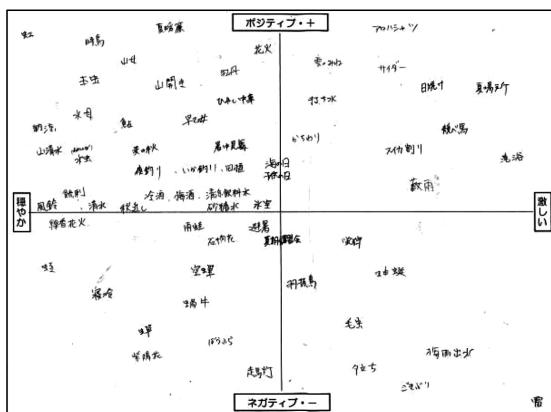


図1 座標軸による季語の分類

### 3.3 俳句の創作と推敲

今回の俳句の創作では上達を目的とするのではなく、推敲する中で言語感覚を豊かにしようとする姿勢を養うことを目的として授業を行った。俳句の創作は、1人では言葉の善し悪しが分かりづらく、自分の持っている言葉の範囲でしか言葉を扱うことができない。そこで、俳句の言葉を検討するため3人グループで推敲することとした。グループで行うことにより、より多くの言葉の使い方の可能性が広がる。

推敲は無記名で交換した俳句の中からグループごとに一句選んで行った。自由に言葉の工夫をしてもらいたかったため細かい条件は指定せず、句から受け取ったものを基によりおもしろいものへと変えることだけを条件とした。生徒は事前に教師作成の俳句をグループごとに推敲している(図2)。そこでの工夫点はクラス全体で推敲のポイントとして共有した。具体的には「句のイメージを支える季語を用いる」「視点を変える」「心情をイメージさせる動作に変える」「動作ではなく様子を細かく表現する」「具体的に想像しやすい表現にする」「比喩を用いる」などの工夫点が挙げられた。これらの意見も踏まえ、生徒たちは推敲を行った(図3)。どのグループも、情景をより具体的にイメージできるように言葉を換えたりよりふさわしい季語を選んだり、自分たちの表したい句の内容がより表現できるように工夫を凝らした。なかなか言葉が決まらないグループもあったが、歳時記を眺めたり互いの意見を検討したりしながら、納得できるものが見つかるまで妥協せず考えていく様子であった。このグループの一人は、後日おもしろい活動だったと感想を述べている。言葉を探っていくのは楽しい活動である。推敲するのに選ばれた生徒か

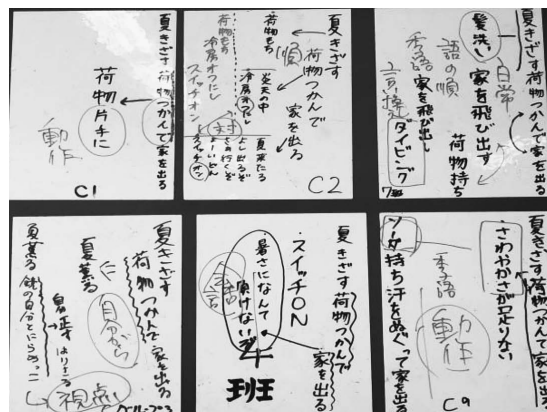


図2 教師の句を推敲

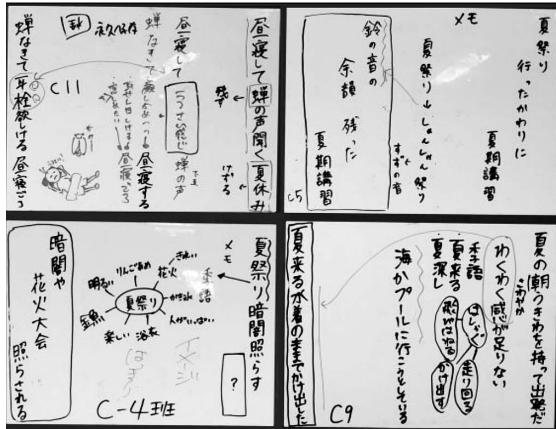


図3 互いの俳句の改作例

らは、「こんな表現もあるのだなあ」と、自分では考えていなかった案が出されたことに感心したという感想があった。言葉に着目し様々な角度から表現の仕方を検討していこうとする姿勢は、今後の言語生活にも関わっていくのではないだろうか。

### 3.4 ミニ句会

個人で作った句を、作者を伏せた状態で批評し合った。できるだけたくさんの意見を得た上で、最終的に一番良いと思う句を選ぶのが望ましい。生徒からは、「視線の移動が促される」「比喻が効果的」「似た意味の言葉が重なっており、別の表現が良い」「俳句に述べられていない情景が想像できる」「場面の様子が曖昧」「助詞の働きでリズムがよい」などの意見が出された。そこには、言葉の意味を膨らませて俳句の内容を味わったり、言葉の用い方に着目して吟味したりするなど、言葉に対する意識の高まりが見られた。また、発言が限られた生徒だけになるのではと心配したが、全員が発表し、さらに複数回発言する生徒もいて、様々な角度から意見が出る活動になった(図4)。

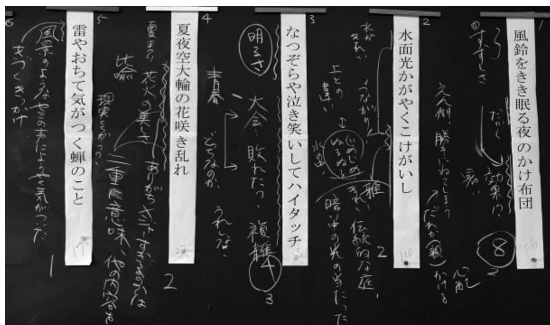


図4 句会による生徒の意見

### 4. 考察と課題

体験的な活動により生徒の気づきを得、それを学習に生かしたいと今回の実践を行った。俳句を創作する活動では、自身が言葉について検討する必要があり、より言葉に着目して考える時間となった。そして、意見を全体で共有することにより、教師が教えなくても自分たちで様々な視点から俳句を見ることができるようになったと考えている。ミニ句会ではそれまでの俳句の創作を通して自分たちで気づき共有した言葉を用いて俳句を批評している。また、句会の最中にも、友達の意見をアレンジして他の俳句に対して意見を述べる様子が見られた。鑑賞から入るのではなく、まず実際に自分たちで俳句を作ってみることで、言葉に対する見方は広がったと言えるのではないだろうか。このように言語活動を積み上げることで、より豊かな言語生活となっていくことが期待される。この後の教科書の句の鑑賞では、多少生徒が改まった様子が見られた。「教科書の句はいい句に決まっている。」そのような見方が言葉に対する気持ちを固くする。純粋に表現に目を向け、表現の価値を読み解いていこうとする気持ちが伝統的に伝わってきた日本の言語文化に対する認識を高めることにつながるだろう。

### 参考文献

- 石塚修 (1996) 多様な「解釈」を楽しむ俳句の授業 —俳句指導の類型化の問題点を考える—. 人文科教育研究 23.13-25.
- 久留島元 (2017) 創作・鑑賞をふまえた俳句の授業 —扉としての俳句—. 同志社国文学 87.54-79.
- 松本修・桃原千英子 (2014) 中学校における俳句の読みと創作. 全国大学国語教育学会発表要旨集 126.29-32.
- 皆川直凡 (2017) 短詩型「俳句」の創作・鑑賞と21世紀の学びとの親和性. 鳴門教育大学情報教育ジャーナル No.14.21-27
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説国語編